

一首鑑賞

日々のクオリア



花山 周子

森尻理恵／廃屋のめぐりに赤きサルビアが手入れされているように咲きおり

森尻理恵第二歌集『S坂』（2008年・本阿弥書店）

森尻理恵の歌集は読まされる。一つには地質学に関わる研究職という特殊な仕事が端的な文体で書かれてゆくためであり、それら具体の面白さは連作を通すことでドキュメンタ的な現場性を齎してもいて、ふだん知ることのない特殊な職業ドラマを見るときのような喜びがある。

道端にしゃがみこんでは重力を測り測りぬ二百点ほど

測るのは重力、時刻、位置、気圧、露頭があれば帯磁率加え

良い地図にすることだけを考えて狭い山道をこわごわと通る

携帯電話の圏外表示続く山 何も起こらず無事に抜けたし

再びは通りたくなし林道の測点四つを地図にマークす

身体より気持ちが悪くて右肩が突然石に変わってしまった

これで今年の測定は終わりと重力計を海を見下ろす道に据えたり

もう明日は帰るだけなり調査用具送り出したる部屋やや広し

〈うきうきと地図準備して萩へ来つ 仕事の中の楽しみもあり〉という歌からはじまる「萩往還」の一連から引いてきた。うきうきと来てはいるが、過酷すぎる労働である。女性がたった一人で、知らない山林に分け入りひたすら計測する。それも、〈もう明日は帰るだけなり調査用具送り出したる部屋やや広し〉とあるように、この「調査用具」を担いでである…

「良い地図にすることだけを考えて」「何も起こらず無事に抜けたし」といった一人の作業のなかで気持ちを持続することの緊張が、リアルに伝わってくる。他の一連にも、

注意力がわれからぼろぼろ抜けていく運転と測定十時間続けて

一人きりの緊張が切れる刹那あり 作業手順を声にしてみる

という歌があり、孤独な作業に徹することの、ある意味究極的な場所で、人間の理性というものが取り出されているのだ。だから〈再びは通りたくなし林道の測点四つを地図にマークす〉は一人のうちにも訪れるほっとした瞬間でもあって、まるで波線グラフのように孤独な作業における緊張の度合いさえがこの一連のなかでは計測されている。

そして、この一連にはこんな歌がふっと置かれていた。

廃屋のめぐりに赤きサルビアが手入れされているように咲きおり

「手入れされているように咲きおり」がなんとも言えない哀しい情感がある。過疎化の進んだ山林で出くわす廃屋。サルビアはもちろん自然に生える植物ではないから、そこに住んでいた人がむかし撒いていたもので、それが自生している。そのサルビアの赤い花の色彩は、なにか人里の気配を残しているのだ。ラピュタの最後に、ロボットが花を持って歩いているシーンがあるけれど、あの感じをちょっと思い出す。

本当にだれもいない土地で、人の気配のあるものを見つけるときどうして人は感情を動かされるのだろうか。孤独な作業の途上に見いだされたこのサルビアの花が本当に美しいなあと思うのである。

- 2019/11/25
- [一首鑑賞 アーカイブ一覧](#)

[前の一首鑑賞へ](#) [次の一首鑑賞へ](#)

Copyright © 一首鑑賞 日々のクオリア

砂子屋書房

一首鑑賞

日々のクオリア



花山 周子

森尻理恵／姫神山は花崗岩ゆえ噴火せぬと朝日に光る山を指差す

森尻理恵第二歌集『S坂』（2008年・本阿弥書店）

森尻理恵の歌集は読まされる。一つには作者自身の興味関心が常にいそいそと動いているからだ。ブラタモリのような土地に対するマニアックな興味関心、恐竜に対する研究者ならではの目線、それらをただ観察しているというのとも違って、人に伝えようとする主体的な口調には物知りの先生から話を聞いているような愉しさがある。

首と尾を水平に伸ばすが定説となり恐竜は組み直されぬ

首と尾は水平に伸ばして恐竜の「スー」は立ちおり新説通りに

『S坂』の「恐竜展」と題された一連であるけれど、この二首は離れたところに置かれている。「**首と尾を水平に伸ばすが定説となり**」と一度詠っておきながら、もう一度「**新説通りに**」というふうに、何度も言う感じが作者の関心の高さを伝えていて、そういう先生の横で課外授業でも受けているようなわくわくした気分になってくるのだ。

北千住の明治の地図に荒川の無きこと示せば学生どよめく

これは、『虹の表紙』の歌。作者は研究職の傍ら、大学の講義も受け持っている。

「北千住の明治の地図に荒川がない（！？）」という事実が学生を「どよめかせる」。みんなが知らないことを教える喜びが端的な文体のなかにしっかり息づいている。「示せば」あたりにそれが出ているわけだけど、一方で学生の前で顔色一つ変えずにやっている感じも出ていて、そこが、すごくいい。森尻さんの授業は面白いだろうなあと常々思わされるところです。

微地形の高低から見た川の跡を桜木見上げる母に教える

教えるのは生徒に限らないわけで、森尻さんにかかれば誰もが生徒だ。

この歌は佐太郎が晩年に住んでよく詠っていた世田谷、目黒の蛇崩川（現在は暗渠）を訪れた場面。お母さんのほうは、のんびり風景を楽しんでいるところに、横から森尻さんが「微地形の高低から見た川の跡」という小難しいことを解説している。「桜木見上げる母に」というふうに、気の散っている生徒側の様子も書かれることで、二人の関係性が見えて来て可笑しい。

ともかくも、こうした端的でシンプルな文体が不思議なほど一人の人物像を感じさせてくる。そして「教える」という人の在り方はなによりも純粋な表現であることを思うのだ。

姫神山は花崗岩ゆえ噴火せぬと朝日に光る山を指差す

岩手県の姫神山（ひめかみさん）はとても美しい山で、啄木が愛したことでも知られていて、

高山のいただきに登り／なにがなしに帽子をふりて／下り来しかな

[4月26日：日々のクオリア](#)

ふるさとの山に向ひて／言ふことなし／ふるさとの山はありがたきかな
汽車の窓／はるかに北にふるさとの山見え来れば／襟を正すも 石川啄木

これらの山は岩手山か姫神山のどちらかだろうと言われている。（それにしても「ふるさとの～」や「汽車の窓～」はあまりに有名すぎてあんまり考えてこなかったんだけど、ほんとにいい歌だなあ）

先の蛇崩川の歌もそうだが、森尻さんは文豪ゆかりの場所にもせつせと足を運んでいて、これは「**旧渋民小学校**」という一連の歌であり、当然ながら啄木を意識しての旅なのである。

姫神山は花崗岩ゆえ噴火せぬと朝日に光る山を指差す

「**姫神山は花崗岩ゆえ**」という授業がここでもはじまっている。そしてこのような人の教授を通過することで、不思議なほど山の美しい姿がありありと出現するのだ。

「**朝日に光る山を指差す**」は、ふつうならその山を単に指さしているんだけど、ここでは「**姫神山は花崗岩ゆえ噴火せぬ**」っていう森尻さんの知識が、それを教える喜びがまっすぐに山を指差していて、そういう人のちょっと煩いくらいの生真面目さが、視線の先の山の輪郭をくっきりさせる。

私は人が生きることとか表現ってものは、自分がいる世界に匂いづけしていくことだとわりとっていて、森尻さんのこういう知識や関心、興味によって匂いづけされていく世界が、とても好きなのである。

- 2019/11/27
- [一首鑑賞 アーカイブ一覧](#)

[前の一首鑑賞へ](#) [次の一首鑑賞へ](#)

Copyright © 一首鑑賞 日々のクオリア

砂子屋書房

一首鑑賞

日々のクオリア



花山 周子

森尻理恵／一応はわれは大人で頭下げ頭上げしときその老いを見つ

森尻理恵第三歌集『虹の表紙』（2019年・青磁社）

森尻理恵の歌集は読まされる。それは、前々回に紹介したような研究者として、女性としての〈女だから駄目だと言われてくれるなと土砂降り雨のように言われる〉〈目立つことが大事と言いたる上司より袂を分かちて八年が過ぐ〉〈人並みの努力だけでは超えられず研究者の壁にわれもここまで〉というような現場の苦悩、現代的課題が率直に語られてゆくためでもあるし、そうしたことを告発するだけではなくて、そこに居ること、生きることの意地が社会における加害者被害者の枠を超えた主体性、森尻理恵という人物を立たせているからだ。

一応はわれは大人で頭下げ頭上げしときその老いを見つ

たとえば、この歌は〈研究者になれぬとわれに言い切りし教授が学会発表を聴きいる〉という歌の次に置かれている。研究者になれないと自分を断じた人が、自分の学会発表を聴いている。けれども、森尻さんの意地はそこでおさまるものではない。「一応はわれは大人で」と、既に戦闘態勢に入っている。「大人で頭下げ」と言いながら、「頭上げしときその老いを見つ」という。なかなかこうは詠いこなせるものではなく、ここには森尻理恵という人物の機微が歌によって端的に取り出され、躍如としたものがある。そして、その端的な文体がとらえているものは、ある長い歳月を背後に置いた瞬間でもあるのだ。ここにある意地にこそ、ここで生きてきた彼女の強さがあるのであり、それが読者

にも真っすぐに受け渡される。何よりも、「**研究者にはなれぬ**」と言い渡されてから今日に至るまでの自らを支えてきたのはこの意地であったはずなのである。

それは並大抵のものではないのだ。『**虹の表紙**』には、ご自身の病気や息子さんの進路のことなど、逆境に次ぐ逆境に次ぐ逆境というくらいしんどい現実が次々に作者に襲いかかるけれど、一貫してその芯に据えられているこの意地が、それら逆境と同じだけの力を持って対峙しているために、精神がぐちゃぐちゃになってもおかしくないような場面でも、まっすぐに読者への道路が開かれている。

この歌集には「**養育費**」という一連がある。森尻さんは息子さんがまだ小さいときに離婚されているのだが、〈離婚して初めて手紙をよこしたり養育費のこと問い合わせ来ぬ〉〈養育費を払い続ける義務あるか大学生とう証拠を送れと〉〈離婚後すぐに再婚したゆえ十年間子に会いたしと一度も言わず〉という怒りを据えた淡々とした歌が並ぶ。

離婚後も家計簿をきちんとつけよう助言の有りきずっと守りぬ

息子から学生証借りコピーせり虚しさがふいに背中を貫く

約束は守らせるのがせめてもの意地と思いぬコピーを送る

そしてこうした歌を見ると、やはり歳月のなかで維持し続けてきた意地が見えてくるのだ。調停委員からの、「**家計簿をきちんとつけよ**」という助言をずっと守ってきた歳月。「**約束を守らせて**」きた歳月。だからこそ、「**虚しさがふいに背中を貫く**」ような瞬間が訪れることの容赦なさには胸が詰まる。コピー機という鋭い光の流れを前にして心の疲れが無防備にしていた背中是不意打ちのように貫かれるのだ。だからこそ無防備になってはいけないという信念にも近い確信が彼女の率直で端的な文体をかたち作ってもいるのだと思うし、忘れないことの意地こそが今の大切な暮しを築いているのではないか。

大人だから自分の好きにして良いと息子に言いたり怒りを隠して

手紙読み息子は静かにこの人と会う必要はないと言いたる

養育費は下宿代の一部にあてており遠慮はせずに大学楽しみめ

こうした歌が「**虚しさ**」を凌駕しているのだ。「**遠慮はせずに大学楽しみめ**」は最高だと思う。だけど、下宿代の一部って大した額じゃないことも知れるのだ。

人の真価は逆境で出ると言われしを満開の辛夷に思い起こしめ

こんな歌があって、逆境なんて誰だって避けて通れるものなら避けて通りたいものだけけど、それに直面してしまったとき、そこにあるはずの「真価」という価値をまっすぐに信仰すること。彼女の率直で端的な文体にはそのようなひたむきさがあるのだと思う。あと一回たぶん書きます。

- 2019/11/29
- [一首鑑賞 アーカイブ一覧](#)

[前の一首鑑賞へ](#) [次の一首鑑賞へ](#)

Copyright © 一首鑑賞 日々のクオリア

砂子屋書房

一首鑑賞

日々のクオリア



花山 周子

森尻理恵／陽に疎き庭でも母は鉢植えをあちこち動かし花を咲かせる

森尻理恵第三歌集『虹の表紙』（2019年・青磁社）

森尻理恵の歌集は読まされる。その最も大きな理由は、その家庭が育んできた生活信条、森尻家の心の在り方、家族の質感のようなものが一冊を通して時間や空間を作り出しているからだ。ふだん、学校や職場に出てきて互いに顔を合わせているときには各家庭の匂いみたいなものはあまりわからない。各々が社会一般になるべくチューニングして集まっているのが現代社会であるし、また現代では家庭の中も単一化しつつあるから、個々の家庭の匂いみたいなものが失われつつもある。歌集においても、作品化するにあたって家庭臭みたいなものは案外削られてしまっていることが多いのだ。

歌でしかものは言えない 誰も彼も言葉の裏には生活がある 『虹の表紙』

こんな歌があって、印象的だった。ここには一つの視点が息づいていると思う。「言葉の裏には生活がある」というのは実際にそうで、生活があるからふだんは言えない言葉、短歌でしか言えない言葉というのは誰もがあると思うけれど、ここでは、社会に対しての家庭や個人のマイノリティー性が見つめられてもいると思うのだ。

鉛筆を毎日失くす子を叱る盗られているなら嫌だと言えと 『S坂』

鉛筆を失くすことを叱っているのではない。「毎日失くす」ことの異常さを感知した上で、「嫌だと言え」と叱っているのだ。こうした親の対応は千差万別でもあって、気づかない親もいれば、先生に相談する親、子供に寄り添う親、静観する親、様々であって何が正しいかなんてわからないけれど、「嫌だと言え」と叱るところには、社会に子供を出すことに対する腹を括った信条が感じられる。それは文体にも強く出ている。「鉛筆を毎日失くす子を叱る」と先に言ってから「盗られているなら嫌だと言え」と、叱る理由を全て伝える。決して単純なところから発せられたのではない、いろんなものを見越した上での理由が告げられているのであり、自らの信条を子供に伝授すること、そのような家庭における一つの歴史が刻まれているのだ。

それはたとえば、〈うちの子にしては上出来マラソンが学年8位の賞状飾る〉の「うちの子」というような言い方に内在される一貫したモチーフであるのだ。「うちの子」という言い方は短歌作品では基本的にはNGワードだと思うんだけど、森尻理恵の歌集においては「うちの子」という主観、「うちの子にしては上出来」という目線、そういうものこそが歌集の核を成しているのであり、〈一つ辞めれば全てが崩れてしまうからと十六歳がまっすぐに言う〉〈親が見ても辛抱をかなり学んだと思えり成績を引き換えにして〉というように、「うちの子」にしっかりと受け渡されていくものもまた描かれていくのである。

こうした信条はまたそのまま外部にも向けられていて、

仕事だからうまくいかないこともある阪神井川がまた打たれたり 『S坂』

こうしたプロの野球選手にも地続きに援用される目線ともなるのだ。これは家庭信条というマイノリティ性が世間目線というマジョリティに反転する瞬間でもあって、こういう部分には人間というものの怖さも潜んでいるんだけど、そういうものが見えるのもまた森尻歌集の興味深さでもある。

人生の分岐はそれなりに越えてきた母の選びしジャケットを着て 『S坂』

紳士服の量販店に吊るされし無地の背広を二着買いやる 『虹の表紙』

母が選んでくれたジャケットを着て森尻さんは人生の大事な局面を越えてきた。そして自身もまた息子に背広を与える。母から自身にそして息子へ伝授されていくものがある。今日ここまであげてきたような歌は、秀歌として取り出すようなものではないけれど、こうした歌こそが森尻理恵の歌集空間

を築いている。それは「**うちの子**」という目線のなかに続く一つのルーツなのであり、アイデンティティなのであり、「家族」というものの今は失いつつある本質がここにはあるのだと思う。

陽に疎き庭でも母は鉢植えをあちこち動かし花を咲かせる

最後に母の歌を紹介したい。路地などを歩いていると、軒先にこまごまときれいな花を咲かせている家がある。「**鉢植えをあちこち動かし**」という細やかな作業がそうした花を咲かせていることに思い及ぶのである。

- 2019/12/02
- [一首鑑賞 アーカイブ一覧](#)

[前の一首鑑賞へ](#) [次の一首鑑賞へ](#)

Copyright © 一首鑑賞 日々のクオリア

砂子屋書房